

公益財団法人やまがた教育振興財団
「教員養成に関する調査研究事業」
報 告 書

振り返る意義を自覚できる小学校国語科の指導法開発に向けた基礎的研究

令和7年3月

山形大学 学術研究院(地域教育文化学部主担当)
講師 菊田 尚人

1. 研究の目的と方法

1-1 研究の背景

主体的・対話的で深い学びの実現に向けた振り返り活動の充実が示されている中で、児童が振り返り活動の意義を必ずしも実感できていないという現状がある。振り返り活動とは、「授業や単元の終末において、その授業や単元の学習内容や学習方法、自分自身の学習状況などを想起し、ノートやワークシートに記入したり学級全体場で確認したりするような活動」(鈴木康之(2003)「振り返り活動」山崎英則・片上宗二編集委員代表『教育用語辞典』、ミネルヴァ書房、p.464)のことである。こうした活動では、児童自身が学習活動を想起しながら自律的に学びを深めることが期待されている。

平成 29 年改訂の小学校学習指導要領では、見通したり振り返ったりする活動を通して児童自身が学習活動に主体的に関わることが重視されている。このことは、授業改善の配慮点として「児童が学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりする活動を、計画的に取り入れるように工夫すること」(p.22)が明確に示されていることから分かる。このような、学習したことを振り返る機会を設けることに関する文言は平成 20 年改訂の学習指導要領から継続して示されている。そのため、次期指導要領においても引き続き授業改善の要点となると予想される。

このように振り返り活動の充実が求められる中で、そうした活動に取り組んでいることの価値を自覚できていない児童がいるという現状がある。すなわち、教師が振り返り活動を積極的に国語科の学習活動へ取り入れたとしても、その方法によっては児童が振り返ることの有効性を必ずしも認知できるとは限らないという問題が生じている。例えば、学習活動に対する教師や児童の意識を調査している全国学力・学習状況調査の平成 29 年度の質問紙調査において、振り返り活動を行っていたかという質問に「あてはまる」もしくは「どちらかといえば、あてはまる」と肯定的な回答をした児童の割合は、そのように回答した教師の割合と比べて低くなっている。山形県の結果を見ても、小学校調査では教師の 91.9%が学習活動を振り返る機会を設けていると回答しているのに対して、振り返る機会があったと答えている児童の割合は 76.2%と低く、回答率に 15.7 ポイントもの差が生じている。

こうした結果からは、児童が振り返り活動の意義を実感する授業を構想できる教師の力量形成が急務だということが分かる。しかしながら、児童が自分にとっての振り返り活動の価値を実感できるような授業づくりについての知見は十分だとはいえない。小学校国語科においてどのような振り返り活動に取り組むかという研究はある。例えば、振り返るためのツールを提案した研究(細川太輔・成家雅史(2019)『国語授業アイデア事典 主体的に学習に取り組む態度を育てる！ 小学校国語科振り返り指導アイデア』明治図書)や教科書にある振り返り活動の手引きを整理した研究(菊田尚人(2018)「資料 小学校国語科教科書で設定されている振り返り活動」『人文科教育研究』第 45 号、pp.79-87)がある。こうした研究の蓄積に学びつつ、振り返ることの意義の自覚化という点から国語科の振り返り活動の研究をさらに進める必要がある。

児童が振り返ることの意義を実感できないという問題の背景には、振り返り活動において目指すべき児童のイメージを教師自身が十分に持てていないという問題がある。教員養成に関する調査研究事業の令和 4 年度研究課題「児童・生徒の発達段階を踏まえた国語科での振り返り活動に関する調査研究」(代表：菊田尚人)(以下、令和 4 年度調査)では、そもそ

もよい振り返りとはなにかということに悩んでいる現場教員の姿が明らかとなった。例えば、振り返り活動への困り感について以下のような回答が見られた。

単にわかった、面白かったではない、本質的な問いにどう語らせて、書かせるのか。単元ごとにきちんと考えているかということ自信はなく、意味のある振り返りにするための教師側の準備不足を恥ずかしながら感じています。(小学校教員)

ねらいに合った振り返りがなされていないときがあるので、どのような振り返りにすると国語の学習にかかわる振り返りが書かれるのか。(中学校教員)

行っていることが生徒の理解を深める、あるいは測る効果が出ているのか。(高等学校教員)

こうした回答からは、振り返りを通してそもそも何を考えさせるべきかが分からず悩んでいる教員の実情が読み取れる。児童が振り返り活動の意義を実感する授業を構想できる教師の育成方法を考えるにあたって、このことは解決すべき問題の一つだといえる。

1-2 研究の目的

本研究の目的は、小学校国語教科書の振り返り活動ではどのような振り返りが求められているのかを明らかにし、それに向けて教師が授業づくりでどのようなことを意識すべきなのかを考えることである。授業での使用義務が定められている教科書は、授業づくりにおいて教師が依拠することの多い教材である。教科書が求める振り返りに近づけるための授業づくりの方策を明らかにすることは、振り返り活動を児童にとって真正な学びへと位置づけるうえで、有益な知見をもたらすといえる。

1-3 研究の対象と分析の方法

教科書ではどのような振り返りが求められているのかを明らかにするための資料として、今回着目するのは教科書に準拠している教師用指導書である。本研究では、T社の小学校国語教科書(令和5年検定版)に準拠した教師用指導書の4年生から6年生までのものを用いる。複数の出版社から教師用指導書が出ている中でT社の教師用指導書を分析する理由は、振り返り活動の解説の中で「主な発問と、児童の反応の例」という具体が示されているからである。

分析にあたって、まずは教師用指導書の振り返り活動の解説にある「主な発問と、児童の反応の例」を一覧表に整理する。この表をもとに、T社の教科書がどのような振り返りを児童に求めているのかを明らかにする。最後に、教科書が想定するような振り返りを児童ができるようにするために、教師は授業づくりにおいてどのようなことを意識すべきなのかを考察する。

2. 教師用指導書の分析から分かる教科書の振り返り活動の特徴

教師による「主な発問」の例とそれに対する「児童の反応の例」を一覧表に整理した。これをもとに教科書が求めている振り返りの要件として以下の三つが明らかとなった。

一つ目は、学習活動の過程にも目を向けた振り返りになっていることである。単元を通して、分かるようになったことやできるようになったことを振り返らせる発問の回答例を見ると、単に何ができたかの結果だけでなくその結果に至る過程も合わせて振り返ることを求めている。例えば、読むことの教材「模型のまち」では「この単元の学習で分かったことやできるようになったことは、どのようなことですか」という発問に対して「色彩表現に着目することで、物語を深く味わうことができた」という回答例が示されている。この回答では、「物語を深く味わう」ためには色彩表現に注目しながら本文を読んでいくという過程が重要だったことまで振り返る児童の姿が想定されている。物語の読みが深まったという結果だけでなく、その過程で自分が何を意識したのかまで捉えられるようになることを教科書は求めているといえる。

二つ目は、言語活動のコツを自分なりに言語化した振り返りになっていることである。単元での学びを今後どのように生かしていきたいかという発問の回答例を見ると、「どのように」についての説明としてその言語活動に取り組む際に何を意識するとよいのかを振り返ることを求めている。例えば、話すこと聞くことの教材「意見を聞いて考えよう」では「友達の意見を聞いて考えることはどんな学習で活用できると思いますか」という発問に対して「道徳の時間で話し合うときでも、ほかの人の考えを聞いて、自分の考えと比べることが大切だと思ったよ」という回答例が示されている。この回答では、「道徳の時間で話し合うとき」という活用できる学習場面の具体だけでなく、その話し合いがうまくいくために「自分の考えと比べることが大切」という話し合いのコツまで振り返る児童の姿が想定されている。実際に話し合いをしたことを想起しながら話し合いがどうすればうまくいくのかを自分の言葉で語れるようになることまで教科書は求めているといえる。

三つ目は、学習活動の協働性を自然と意識できる振り返りになっていることである。児童が振り返りを通じて他者の学習活動に目を向け、新たな気づきを得られるように、振り返り活動自体を協働的な学びの場として機能させることが期待されている。例えば、話すこと聞くことの教材「提案します、一週間チャレンジ」では「自分のスピーチを思い出して、「言葉の力」がどうだったかを振り返ってみましょう」という発問に対して「問いかける言い方は、〇〇さんのを参考にやってみたいな」という回答例が示されている。振り返り活動が他者のスピーチで参考にしたいことや真似したいことを見つけるといふ協働的な学習となることが想定されている。

3. 教師用指導書を踏まえた国語科の授業づくりへの示唆

教科書が求める振り返りの要件を踏まえ、授業づくりにおいて教師が意識すべき点は二つある。

第一に、学習活動の過程で児童が試行錯誤できる機会を設定することである。教科書では、学習の結果だけでなく過程にも目を向けた振り返りが求められている。こうした振り返りを可能にするには、児童自身が活動の中で試行錯誤できる場면을教師が意識的に設けることが重要である。たとえば教材「模型のまち」では、物語を味わう方法を自ら考える機会が

なければ、「色彩表現に着目する」ことの有効性を実感することは難しいだろう。自らの言語活動の進め方を考え、選択する経験があるからこそ、児童は振り返りにおいて学びの過程に意識を向けるようになる。そのため、試行錯誤の機会を工夫して取り入れることが、過程に着目した振り返りを可能にする鍵となるといえる。

また、試行錯誤の過程では、言語活動をよりよく行うためにどうすればよいかを考える必要がある。その中で身につけた工夫やコツを児童が言語化できるようになることも期待される。もちろん言語化自体の困難さもある。しかしながら、そもそも言語活動の過程で試行錯誤する体験が十分でなければ、その前段階でつまづいてしまう。したがって、試行錯誤の経験を豊かに仕組むことが重要である。

第二に、児童同士の協働的な活動を効果的に取り入れることである。教科書では、学習活動の協働性を意識した振り返りが求められている。そのためには、単に児童同士が一緒に活動する機会を設けるだけではなく、他者の学びに関心を持ち、互いの工夫や意識に目を向けるような場を設計する必要がある。たとえば、他の児童がどのような点に注意して言語活動を行っているのか、どのような工夫をしているのかを語り合う機会を設けることで、協働的な学びを深めることができる。こうした協働性を意識させる働きかけが、振り返りの質を高める上で重要である。

4. 今後の取組及び期待される効果

本研究において、教師が意識すべき点として「学習活動の過程で児童が試行錯誤できる機会を設定すること」「児童同士の協働的な活動を効果的に取り入れること」の二点を明らかにした。

本研究で明らかとなった教師が意識すべき点についての知見を教員養成段階において活用することで、国語科における振り返り活動を構想できる教員の育成が可能になるであろう。また、教員研修における資料として今回の教師用指導書の一覧を活用することで、振り返り活動の発問例についての示唆を与えることもできるだろう。